

○謝花 治・翁長彰子・出花幸之介
(沖縄農研)

【目的】

沖縄本島南部の八重瀬町では、カンショ茎葉利用の新品種「ちゅらまる」が多く栽培されており、主に学校給食の食材や加工原料用に出荷されている。栽培は露地で行われており、夏場の出荷は多いが、気温が低い冬春期は少ない状況にあり、実需者から年間を通じた安定供給の要望がある。そこで、本試験では、被覆資材を用いたトンネルとハウス栽培で冬春期における安定生産を検討した。

【材料および方法】

沖縄県農業研究センター（島尻マージ客土）において、「ちゅらまる」を供試し、露地、トンネル（間口 1.1m）、ハウス（間口 3m）の試験区を設け、各区 20 株の 3 反復で栽培試験を行った。2013 年 8 月 23 日に畦幅 90cm、株間 40cm、条間 40cm(556 株/a)で植付け、毎日 20 分間の自動灌水を行った。9 月 24 日に地際から 10cm の高さで株揃えを行い、茎長 20cm に達した頃の 11 月 7 日に 1 回目の収穫を行った。11 月 13 日にトンネル区とハウス区の被覆を開始した後は、生育が旺盛であったハウス区を基準に、全試験区を一斉に収穫した。収量は各区 20 株の全刈り調査、茎葉部の特性は各区 5 株のサンプリング調査により評価した。また、各区の温度および地温を測定した。トンネル区の温度管理は、11 月 13 日から 12 月 24 日まで裾換気、12 月 25 日から 3 月 6 日まで密閉し、それ以降は再び裾換気を行った。ハウス区では、32℃以下に設定して側窓自動換気を行った。

【結果および考察】

気温が低く、日中晴れた 1 月 23 日の各区の温度と地温を比較すると、トンネル区とハウス区の温度は、日中に高く、地温では日中だけでなく夜間も安定して高く、両区の保温効果は高かった（図 1, 2）。被覆後における 12 月から 4 月の茎葉部 4 回収穫合計は、露地区 476 kg/a、トンネル区 885kg/a、ハウス区 1004kg/a であり、トンネル区、

ハウス区ともに露地区の約 2 倍の増収効果があった（図 3）。

以上の結果から、冬春期に被覆資材を用いたトンネルとハウス栽培は増収効果が高く、安定生産に有効な栽培方法と考えられる。

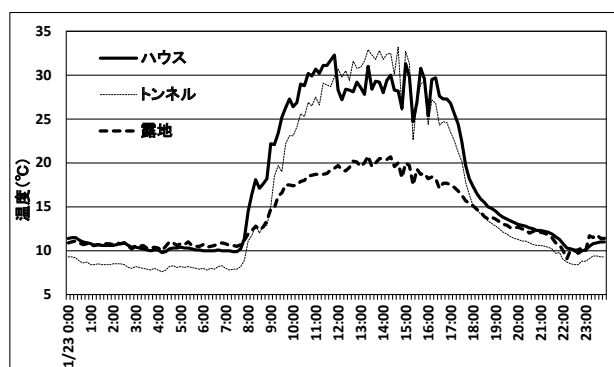


図 1 各区の温度推移

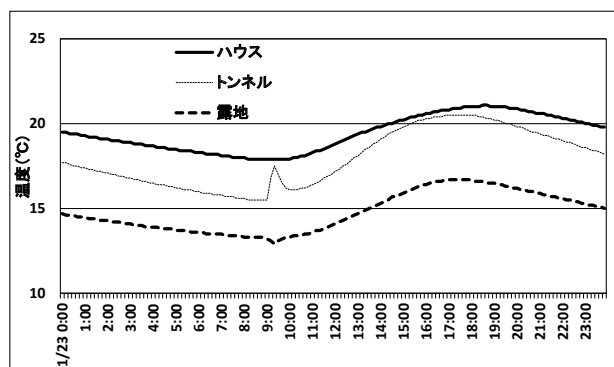


図 2 各区の地温推移

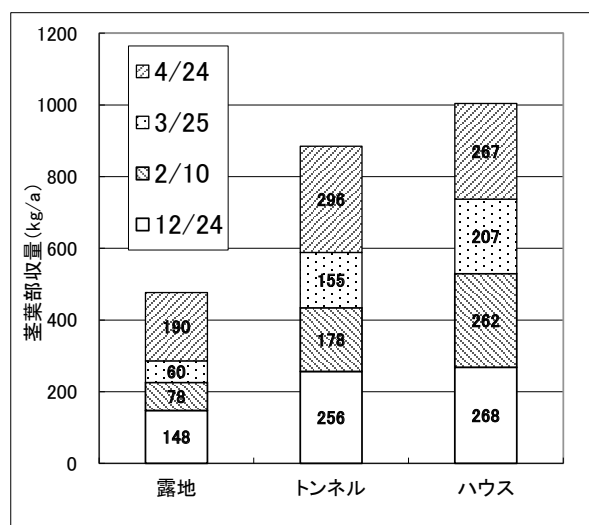


図 3 冬春期における各区の茎葉部収量